2012 花農家はいま…

①キンセンカ

厳しく冷え込んだ12月中旬の日曜日。南房総市白子のJA安房花き集出荷場に、白浜地区からキンセンカを積んだトラックが次々と運び込まれる。最終検品を終え、この日は100本入りの500箱が首都圏をはじめ東北、関西の市場に送り出された。

花き共撰出荷の現場責任者、川名康弘さんは「荷が多くなり、ようやく年末らしくなってきた。この時期に何とかいい値段をとって、彼岸の需要ピークにつなげたい」と祈るように話す。

オンリーワン産地を守る

鮮やかなオレンジ色の花を咲かせるキンセンカは地中海沿岸が原産だが、冬の代表的な仏花として日本に定着した。白浜は全国一の生産地。「花持ちがいい」と、彼岸や正月を控えた時期には根強い需要がある。

だが「十数年前には沖縄産の小菊が彼岸に向けて大量出荷され、キンセンカは一時大きな打撃を受けた」（JA関係者）という。大手スーパーやホームセンターで花の扱いが増え、花き市場では大口向けの「せり前取引」が主流に。各農家の個別出荷が中心だったキンセンカは数量がまとまらず、単価が下がった。

JAはこの事態を受けて、生産者に共撰出荷を奨励。「スケールメリット」を出して大口顧客に対応する道を選択した。成果は徐々に上がり、今では白浜で90軒、千倉で10軒が共撰に参加。「オレンジスター」の統一ブランドで年4万6000箱を出荷する。

自浜では高齢者が徐々に栽培をやめていく一方、会社の定年を機に新たな担い手となる熟年世代も少なくないという。「それまで一人で花をやっていたお母ちゃんが、夫の尻を叩いて作付けを増やす。露地だから大きな投資はいらない。近所の目もあるから、お父ちゃんも働いていないと」と地元農家は説明する。

現在、共撰のキンセンカ部会長を務める橋本貞司さん（64）＝南房総市白浜町乙浜＝は49歳で勤めを辞め、親の畑で妻かづえさん（61）と花栽培を始めた。

「最初は15㌃しかできなかったが、今は30㌃。夫婦で年1000箱出荷できれば何とか生活できるとがんばってきた。年金をもらい始めて、やっと少し余裕が出てきた。無理だと思っていた自宅の屋根のふき替えもできたし」。

キンセンカは平均して1本30円前後と、決して〝もうかる花〟とはいえない。しかし、橋本さんはこう考えている。「よそではつくっていないから、今では出荷量が増えても値が大きく下がることはない。消費者にとっても手ごろで、使い勝手がいい。この土地の気候に適した手堅い花、恵まれた花だ」。

◇　◇　◇

大正2年（1913）に現在の館山市西岬地区で岩永益禅師が初めてキンセンカを栽培し、東京・築地の市場に出荷してから今年で100年が経つ。〝花どころ〟房州の生産者の現状を取材して回った。

キンセンカ部会長の橋本さん夫妻＝南房総市白浜町